

## 終末前々主日礼拝説教 「あなたは星の数のように」

日本基督教団石神井教会 2017年11月12日

### 【旧約聖書日課】創世記 15章1～18節

<sup>1</sup>これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

<sup>2</sup>アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」<sup>3</sup>アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」

<sup>4</sup>見よ、主の言葉があった。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

<sup>5</sup>主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

<sup>6</sup>アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

<sup>7</sup>主は言われた。「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」

<sup>8</sup>アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができでしょうか。」

<sup>9</sup>主は言われた。「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのものに持って来なさい。」

<sup>10</sup>アブラムはそれらのものをみな持って来て、真二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置いた。ただ、鳥は切り裂かなかった。<sup>11</sup>禿鷹がこれらの死体をねらって降りて来ると、アブラムは追いつめた。<sup>12</sup>日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。

<sup>13</sup>主はアブラムに言われた。「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。<sup>14</sup>しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。<sup>15</sup>あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。<sup>16</sup>ここに帰って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである。」

<sup>17</sup>日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。<sup>18</sup>その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。」

### 【福音書日課】マルコによる福音書 12章18～27節

<sup>18</sup>復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。<sup>19</sup>「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。<sup>20</sup>ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さないで死にました。<sup>21</sup>次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さないで死に、三男も同様でした。<sup>22</sup>こうして、七人とも跡継ぎを残しませんでした。最後にその女も死にました。<sup>23</sup>復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」<sup>24</sup>イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。<sup>25</sup>死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。<sup>26</sup>死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。<sup>27</sup>神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」

## 「何をしてくださるのですか？」

わたしたちの教会では、来週の日曜日を「オープンチャーチ」として、普段教会に中々おいでいただけないような家族や知人、地域の方々をお迎えしようとしています。この教会堂にはエレベーターもありますし、正面はガラス張りですが、それでも中を覗き込んでいただける構造になっていますが、それでも、「教会は敷居が高い」と思われている方は少なくないでしょう。「教会は嫌いだ」というような方を無理やりお連れすることはできないとしても、「教会は自分には恐れ多いところだから」と冗談半分で言われるような方であれば、ぜひ、その「恐れ多い」と感じられているところを取り除いて差し上げて、おいでいただけるようにしたいと思うのです。教会としてはもちろん、わたしたち一人ひとりの取り組みとして、そうしたいと思うのです。「オープンチャーチ」を、ただの年一回限りのイベントで終わらせてしまうのではなく、周囲の方々の教会に対する「恐れ」を取り除いていただくための一人ひとりの取り組みのきっかけにしたいのです。

今日の旧約日課（創世記 15 章）は、「**恐れるな、アブラムよ**」という神の御言葉が告げられることから始まっています。この「アブラム」という人物は、「アブラハム」のことですが、この場面では、まだ「アブラハム」と名乗っていないのです。「アブラハム」と名乗るようになるのは、この後の 17 章で、神に「アブラハムと名乗りなさい」（17:5）と命じられてからです。

「アブラム」という名を名乗っていたアブラハムは、聖書の物語るところによると、75 歳で神の呼びかけに応じて新しい生き方を始めた人です（12 章）。それは、自分の父テラの死が一つのきっかけだったようですが、「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい」（12:1）という神の言葉に促されて、今まで住み慣れてきたところを離れ、新しい約束の地を目指して旅を始めたのです。

最近でこそ 75 歳から新しいことを始めるというのは、決して特別なことでも、珍しいことでも、なくなりましたが、わたしたちは、年齢の老若にかかわらず、慣れ親しんだところから離れるというのは、決して容易なことではないでしょう。むしろ経験の少ない幼子や若者のほうが、一度得たところから中々離れがたい、ということだってあるのです。しかし、アブラハムには、神の呼びかけに応じて腰を上げ、新しいことを始めるだけの気概も、自信も、あったのではないのでしょうか。それが、75 歳の新しい旅立ちを促したのです。

けれども、そのアブラハムが自分の旅行きの目的を見失ってしまうことが、あったのです。「**わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか**」との訴えは、アブラハムの正直な思いであったのでしょうか。「自分は、何のために、慣れ親しんだところを離れて、新しい地を目指しているのか」との思いが、アブラハムには募っていたのに違いないのです。それは、しかし、当然のことかもしれません。この旅行きの目的は、アブラハム自身から出てきたものではないからです。アブラハムの新しい旅の目的は、神のご計画の中にあるものだからです。その神の御心が分からなくなったとき、「恐れ」が心に湧き上がってきたのです。

## 「恐れるな！」

わたしたちは、もちろん、神を「畏れ敬い」ます。神がどれほどの愛に満ちたお方だとしても、たとえ主イエス・キリストがわたしたちのことを「友」とお呼びくださるとおっしゃられたとしても、それは、わたしたちが神に対して畏敬の念を抱かなくなるということではありません。むしろ、本当に畏れ敬うべき方として神を知るようになってこそ、その神が愛と憐みをもってわたしたちの近くに来ておいでくださるといことが、大切な意味を持つようになるのでしょう。

ところが、神は「恐れるな」と告げられました。主イエスも、弟子たちに「恐れるな」とおっしゃられることがあったのを思い出します。神はここで、アブラム（アブラハム）に対して、「苦しゅうない、近こう寄れ」という意味で「恐れるな」とおっしゃられているのでしょうか。ある意味では、そのとおりなのでしょう。「恐れ」は、人の心を閉ざさせるものともなるからです。アブラムは、このとき、神に対して心を閉ざし始めていたのです、「**わたしに何をしてくださるというのですか**」と。

アブラムは、このとき、天幕の家の中にいたのです。そこに閉じこもっていたのかもしれませんが。もともとは、75歳で新しい旅を始めることができるような気概のある人でした。飢饉に見舞われても、エジプトに移住してかえって財産を増して帰って来るような、実業家としての実力もある人でした。あるいは、王たちの戦争に巻き込まれた甥ロトの家族を救出するために、自ら組織した精鋭部隊を派遣して、見事作戦を成功させてしまうような実力者でもあったのです。この世を生きていく上では、何の不安もない、恐れもない。それが、アブラムでした。「神が、わたしに何かをしてくださる、というようなことを、わたしが期待する必要があるだろうか」。アブラムの思いは、そのようなものだったのかもしれませんが。

人は、期待しない相手には、心を閉ざしてしまうものです。信頼を寄せて関わることをやめてしまうのです。もちろん、表向きは、体面を整えて付き合いを続けるかもしれませんが。ところが、信頼関係を築いていくことをやめてしまい、心閉ざして、「もうあの人には何も期待しない」との思いを募らせてしまう。そういう関係に陥ってしまうことが、わたしたちには、あるのです。それは、人間同士だけではありません。神との関係でも、同じなのです。

「**恐れるな**」と、心閉ざして家の中に引きこもっていたアブラムに呼び掛けたのは、神でした。人と神との関係は、いつでも神の側からの働きかけによって回復されるのです。神への不服を募らせるアブラムを、神は、外に連れ出されます。

「**天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい**」。

アブラムは、閉じこもっていた自分の家から外に出て、空を見上げたのです。しかし、実際に星の数を数えたわけではないでしょう。ただ、満天の星を見上げたのです。数えきれない星々を天に置かれた神の御業を、思い巡らしたのです。ちょうど、わたしたちが主の日ごとに礼拝堂で天を見上げ、天窓のさらに先にある天の御業に、また窓の先にある地の御業にも、思いを寄せるように、です。

## 「あなたの受ける報いは大きい！」

このようにして、神がアブラムにご自身の大きな御業をお示しになられたのは、二度目でした。アブラムが自分の跡取りとして旅に連れ出していた甥のロトと別れて行かなければならなくなったときに、神は、アブラムにおっしゃられたのです。「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見える限りの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう」（13:14~16）。

天の星のように、大地の砂粒のように、数えきれないもの。それを、神は、アブラムにお与えになるとお告げになられたのです。大いなる報いを受けることになると、お約束くださったのです。

それは確かなことでしょう。神の大いなる御業の確かなこと、その恵みの豊かなこと、わたしたちにもその恵みが約束されていること。わたしたちが信じる神が真の神でいらっしゃるというのは、それが確かなことだということです。だからこそ、わたしたちもこの礼拝で、こう讚美して歌いました。「主のめぐみは浜の真砂、その数いかでか数え得べき」（讚美歌 227 番 2 節）。「くすしきみ恵み我を救い、まよいしこの身もたちかえりぬ」（讚美歌 451 番 1 節）。

けれども、そのように讚美を歌いながらも、そのように祈りながらも、わたしたちの心のうちには、なお迷いがあるかもしれません。なお、本当には開ききれていない心の扉があるかもしれません。神に対して明け渡せない、自分の隠し部屋が、心の中にあるのです。

アブラムも、そうだったのです。外に連れ出されて、天を見上げて、満天の星のうちに神の豊かな恵みの御業を見せられても、なお、アブラムは、心の内に貼りついた自分の思いを訴え続けました、「わが神、主よ、この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましようか」と。

疑い深く、神の御前でもなお自分の思いや考えにこだわり続ける。それが、わたしたちの現実の姿かもしれません。そのような自分の姿を知っているからこそ、わたしたちは、ときに、一人自分の中に閉じこもろうとしてしまうのです。神に対しても、人に対しても、自分の疑い深さやこだわりを押し付けることになるのが申し訳なくて、ひとり恐れ引きこもろうとしてしまうことがあるのです。

それでも、わたしたちは、神にお呼びいただきました。自分の家に閉じこもっていたかもしれない一人ひとりが、「恐れるな」とお呼びいただいて、ここに集められてきました。ここで、「天を仰げ」、「東西南北を見渡せ」と、天と地の御業に目を向けるように導かれているのです。

これが、わたしたちに与えられた信仰なのです。「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と語られている、聖書の教える信仰の姿なのです。ここに留まる者は、神の御業を見ているのです。星の数ほどにまで大きく豊かに広がる、恵みの御業を見ているのです。互いに対する「恐れ」ではなく、「信頼」。神は、わたしたちに、「信頼」の実りを豊かにお与えくださるのです。